



創業80周年記念式典・ 祝賀会開催

2026年5月22日、広島市南区のホテルグランヴィア広島で
創業80周年記念式典・祝賀会が開催されました。
東京大学薬学部 池谷裕二教授の記念講演をはじめ、
小田会長や藤井社長らによる鏡開きなどを実施。
約650人が出席し、さらなる発展に向け、
挑戦し続けることを誓い合いました。

お祝いリレーメッセージをお寄せいただいた皆さま(敬称略・五十音順)

天谷 宗一郎<元広島東洋カーププロ野球選手・RCC野球解説者>
池田 晃治<㈱ひろぎんホールディングス 代表取締役会長・前広島商工会議所 会頭>
今村 文彦<東北大学大学院 副学長・災害科学国際研究所 教授>
岩本 雅之<社会福祉法人みずうみ 理事長>
大本 修<一般社団法人建設コンサルタンツ協会 会長>
菊池 雅彦<埼玉大学大学院理工学研究科 教授・元国土交通省大臣官房技術審議官>
小林 祐司<大分大学 理工学部長>
佐竹 節夫<日本コウノトリの会 代表>
高垣 廣徳<東広島市長(広島大学スマートシティ共創コンソーシアム 副幹事機関)>
鶴 衛<学校法人鶴学園 理事長・総長>
中村 尚道<岩手県宮古市長>

中島 充人<社会福祉法人広島修道院 理事長>
西垣 誠<岡山大学 名誉教授>
畠山 仁<アジア航測株式会社 代表取締役社長>
羽藤 英二<東京大学大学院 工学系研究科 教授・東京大学復興デザイン研究体 統括>
林 伊佐雄<日本国土開発株式会社 代表取締役社長>
藤井 堅<広島大学 名誉教授>
藤原 章正<広島大学 名誉教授>
山本 博之<エキキタまちづくり会議 会長>
山本 正徳<岩手県前宮古市長>
吉川 眞<大阪工業大学 名誉教授>



復建調査設計株式会社 創業80周年記念誌

2026(令和8)年7月発行
発行：復建調査設計株式会社 〒732-0052 広島市東区光町二丁目10番11号 [https://www.fukken.co.jp/]
編集：創業80周年記念事業推進委員会 記念誌ワーキング 構成・印刷：中国新聞社



復建調査設計 創業80周年記念誌

復興から創造へ

Formulation of Management Vision, Strategy and the GEX Medium-Term Management Plan
Establishment of the GX Promotion Center

←2020→

2015

Establishment of the Social Design Innovation Center

2026

80th Anniversary Commemorative Lecture, Ceremony, and Celebration Held

1946

Establishment of the Reconstruction Construction Technology Association

1996

Completion of the 50th Anniversary.
Assets increased to 800 million yen;
Number of employees reached 750.

1966

Company name officially changed to
Fukken Co., Ltd.

2023

Establishment of the GX Promotion Center



復興から創造へ 枠を超えて進化し続ける



代表取締役社長
藤井 照久

1946年、戦後の国土復興を旗印に設立した社団法人を前身とする当社は2026年5月、おかげさまで80周年を迎えました。

創業以来、社是の筆頭に掲げるのは「進取」の二文字です。日本の社会資本整備の一翼を担おうと、道路や河川などの基盤整備、地盤環境・地質調査をはじめ、交通政策や交通基盤整備、環境・エネルギー、都市計画・地域計画などの事業を展開。時代のニーズを先取りすることで業務領域を広げ、西日本最大級の総合建設コンサルタントに成長しました。11年の東日本大震災や14年の広島土砂災害など、自然災害が相次ぐ中、防災や事前復興の分野の活動も重視。東京大学などの研究機関と連携し、災害に強い都市開発にも携わってきました。

組織としての大きな特長は、中国・四国地方を基盤としている点です。広島に本社を置き、中国・四国地方はもとより、関西・関東や九州、全国へとフィールドを拡張。国土交通省、防衛省、農林水産省、内閣府など、国の機関との業務上のつながりも深く、最先端の技術や情報を吸収し、地域のインフラ整備に生かしています。加えて、親会社などを持たない独立系企業である点も特長の一つ。経営の自由度が高く、意思決定のスピードも速いため、顧客や地域により一層寄り添った技術提案が可能です。

そして今後、100周年に向けて目指すのは、従来の総合建設コンサルタントの枠を超えた未来社会創造企業としてのさらなる進化です。その取り組みはすでに始まっており、例えば15年発足の新部署「社会デザイン創発センター」では自治体、事業者、地域住民と協働し、地域課題の解決を支援。20年発足の「DX推進センター」では3次元のデジタルツインの技術を生かした新たな都市機能の開発を進め、23年新設の「GX推進センター」では洋上風力などの脱炭素事業をサポートしています。

少子高齢化による人口減少、労働力不足、地域間格差の広がり、社会インフラの老朽化など、日本は多くの深刻な社会課題を抱えています。戦災からの復興に始まり、この80年間で培い、積み上げてきた技術やノウハウの真価を発揮するのはこれからです。より豊かで安全な国土形成のために、これまで以上に努力と研鑽を続けてまいります。

会社の歩み

昭和21年 5月	社団法人復興建設技術協会設立
12月	社団法人復興建設技術協会中国四国支部設立、事務所を広島市霞町県庁2号館に開設、測量業務を開始
昭和26年 5月	地質業務を開始、職員35名
昭和31年 4月	支部事務所を広島市基町県庁構内(自治会館)に移転
5月	支部長に松村恭二就任
昭和32年 5月	設計業務を開始、職員67名
昭和35年 4月	株式会社中国四国復建事務所を設立、5月1日より営業開始、資本金200万円、職員115名、代表取締役社長に松村恭二就任
昭和41年12月	社名を「復建調査設計株式会社」に変更登記
昭和53年 6月	本社を広島市東区光町二丁目10番地11に移転登記
昭和55年 7月	代表取締役社長に本多勇就任
昭和57年 7月	資本金2.5億円に増資、職員583名
平成 2年 7月	代表取締役社長に羽原俊行就任
平成 8年 5月	創業50周年
7月	資本金3億円に増資、職員753名
平成 9年11月	ミャンマー連邦共和国にヤンゴン事務所設立
平成10年 2月	ISO9001取得
平成11年 3月	ISO14001取得
平成14年 4月	第6次中期経営計画策定
平成16年 7月	代表取締役社長に近藤英樹就任、執行役員制度の導入
平成17年 5月	第7次中期経営計画策定
平成18年 3月	アジア航測(株)との技術提携の締結
平成19年 2月	ベトナムに合弁会社設立
平成20年 4月	第8次中期経営計画策定
10月	(株)日本構造橋梁研究所をグループ会社化
平成21年 7月	代表取締役社長に福成孝三就任
9月	第一復建(株)をグループ会社化

平成23年 5月	長期経営ビジョン2020・第9次中期経営計画策定
6月	アジア航測(株)との資本業務提携の締結
平成24年 7月	代表取締役社長に小田秀樹就任
平成25年12月	CIM推進室新設
平成26年 4月	プライバシーマーク取得
5月	ミャンマー連邦共和国に現地法人設立
7月	東京大学内にアジア航測(株)と共同で社会連携講座「復興デザイン研究体」を開設
平成27年 5月	社会デザイン創発センター新設
6月	(株)大設をグループ会社化
平成28年 5月	広島大学と全学を対象とした包括的研究協力協定締結
平成29年 5月	第11次中期経営計画策定
5月	合弁会社Aizawa Myanmar Co., Ltd.を設立
6月	(株)天野測量設計をグループ会社化
平成30年 2月	(株)文化財サービスをグループ会社化
9月	(株)サンキをグループ会社化
令和 2年 5月	経営ビジョン2030・第12次中期経営計画策定
5月	DX推進センター新設
7月	代表取締役会長に小田秀樹、代表取締役社長に來山尚義就任
令和 3年 6月	(株)宮崎測量設計コンサルタントをグループ会社化
令和 4年 9月	洋上風力プロジェクト室新設
10月	広島工業大学と包括的連携に関する協定締結
令和 5年 5月	第13次中期経営計画策定
5月	GX推進センター新設
12月	(株)西部試験工業をグループ会社化
令和 6年 7月	代表取締役社長に藤井照久就任
令和 7年 3月	ISO27001取得
3月	(株)ジオテックをグループ会社化
4月	岩手県宮古市と包括連携に関する協定締結
7月	ISO55001取得
令和 8年 5月	第14次中期経営計画策定
5月	創業80周年記念講演・式典 祝賀会挙行

夢のある未来を、 私たちの挑戦から

未来を豊かにすること。

私たちは、その方法を変えていきます。

つくる、つなぐ、つづく。

戦後復興期からこの国の未来を描いてきた知見と技術力で、

持続可能な社会の実現に向けて挑戦します。

夢のある未来を、創造する。

それが私たち復建調査設計の使命です。



Dreams for

●総合計画部門

- ・多様なデータの分析による効果的な道路づくり・交通まちづくりの計画策定
- ・広域計画・都市計画、地区・施設計画、復興計画の策定
- ・移動手段の維持確保に向けた実行性の高い公共交通計画策定や新たなモビリティの導入検討
- ・港湾・漁港の整備計画、臨海部の賑わいづくり、カーボンニュートラルポート形成に向けた計画策定
- ・ワークショップや社会実験などによる実効性の高い施策検討

●地盤環境部門

- ・地質情報の基本となる地形調査や地表の地質調査
- ・ダム、トンネル、道路等の設計に必要な地盤の調査・試験・解析
- ・埋立地、空港、港湾等の設計に必要な軟弱地盤の調査・試験・解析
- ・トンネルや道路等の維持管理に必要な点検・調査

●空間情報部門

- ・工事に必要な土地の境界・面積の計測、補償に必要な家屋・工作物等の調査・算定
- ・陸・海・空から三次元計測機器による測量および詳細な地形図の作成
- ・災害時における小型無人航空機(UAV)を併用した現地状況の調査・測量
- ・堆積物の調査や沿岸施設等の設計に必要な海底の測量および地形図(2D、3D)の作成

●道路・地域開発部門

- ・道路・トンネルの計画・設計、点検・調査・診断、補修設計、維持管理計画
- ・物流・産業・再生エネルギー拠点の計画・設計および各種許認可手続き
- ・公園や広場の計画・設計、点検・調査・診断、補修設計、維持管理計画

●河川砂防部門

- ・水災害の激甚化・頻発化に対する流域全体の水害を軽減させる流域治水計画
- ・洪水氾濫から生命・財産を守るための河道計画、堤防・護岸・堰・水門などの河川施設設計
- ・シミュレーションを用いた河川保全計画や設計
- ・土砂災害から人命や社会資本を守るための斜面・渓流調査および防災施設設計
- ・災害時の迅速な被災状況把握、復旧・復興のための調査・設計

●沿岸・地震防災部門

- ・港湾・海岸施設(岸壁、棧橋、防波堤、堤防など)の計画・設計、点検・調査、補修設計、長寿命化計画
- ・シミュレーション技術を生かした地震、津波、高潮などの被災予測や対策工法検討
- ・空港基本施設(滑走路、誘導路、エプロンなど)の設計・補修設計
- ・土砂災害、洪水、地震、津波、高潮などのハザードマップ作成や地域住民向けワークショップ、業務継続計画(BCP)の策定支援

●保全構造部門

- ・橋や道路構造物の計画・設計、点検・調査・診断、補修・補強設計、拡幅設計、長寿命化計画
- ・鉄道橋および関連施設、地下鉄関連施設、地下構造物の計画・設計、点検・調査・診断、補修・補強設計、改造設計
- ・上水道・工業用水施設、下水道の計画・設計、点検・調査・診断、補修・補強設計、長寿命化計画

●環境部門

- ・再生可能エネルギー事業や道路事業などに係る環境アセスメント
- ・ネイチャーポジティブの実現をサポートする貴重な動植物の保全や藻場・湿地などの自然再生の調査・計画
- ・サーキュラーエコノミーの実現に向けた循環型事業の提案から官民連携による施設運営支援
- ・ネットゼロの実現をサポートする脱炭素計画策定や沿岸域のブルーカーボン創出、クレジット申請支援

●国際事業部門

- ・海外プロジェクトにおける設計・施工管理などのコンサルティング業務
- ・建築・土木(道路事業、港湾事業他)に関する測量・地盤調査・設計及び施工管理業務
- ・地盤及び地震等に関する土質調査・解析及び基礎の設計及び地盤改良設計業務
- ・井戸や浄水設備また給水設備をはじめとする給水プロジェクトの設計・施工・施工管理業務
- ・太陽光発電設備の設計・施工および施工管理業務

the future

創業80周年に寄せて

復建の未来

40年近く前、復建調査設計でアルバイトを始めた。

最初は24時間の交通量調査員で、報告書のまとめ方について熱心に指導をいただいた中国地方の道路ビジョン、需要予測計算、阿品駅前広場の基本計画や大連の都市計画まで、土日でも会社に入り浸りで仕事をしていた。

自分の専門家としての基礎はほぼあの頃身に付いたと言っていい。どの仕事も面白く新鮮で、地域を良くするためにと社員の方々と丁寧に取り組んでいた。戦災復興計画を始原とする復建調査設計の創業の歴史に照らすと(よく考えてみれば戦災復興を体験してきた人たちが当時同じ職場にいたはずで)然しタモリさんが今の時代を「新たな戦前」と語ったように、今時代は一回りしようとしているのではないだろうか。

生成系AIやフィジカルAIの進展は、フロントヤードとバックオフィスの仕事をAIやロボットに置き換え、社会の慣習や価値観そのものが大きく揺らぐ中、今までの復建のやり方が全く通用しないこともあるだろう。果たしてどうすべきか。激変する外部の変化に耳を傾け、地域の実情と向き合い、信頼できる仲間たちと一緒に、変わることを怖れず、変わらないことをいかにして選択すべきか。これからの復建に誰よりも期待したい。



東京大学大学院
工学系研究科 教授
羽藤 英二

ご創業80周年を祝して

このたび、復建調査設計様が創業80周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

戦後の復興期に創業されて以来、地域社会の発展と日本の社会インフラ整備に多大なる貢献をされてきた貴社の歩みに、深い敬意を表します。弊社とは2006年の業務提携以来、技術協力や両社の特色を生かした高度なサービスの提供を通じて、互いの成長に寄与してまいりました。近年では、BIM/CIMや3次元技術の活用、社会インフラの維持管理分野など、未来志向の積極的な取り組みを活発にさせていただいております。

今後も、貴社の志と技術力、そして構想力が、より豊かで持続可能な未来社会の創造に向けて、ますます重要な役割を担うことと確信しております。そして弊社も引き続き、貴社と共に高質な社会づくりに貢献できるよう、技術力と創造力を磨きながら努めてまいります。

これまで歩まれた輝かしい実績を礎に、時代と社会のニーズを柔軟に対応しながら、さらなるご発展を遂げられることを祈念するとともに、貴社のますますのご繁栄とご健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



アジア航測株式会社
代表取締役社長
畠山 仁

変化する社会 進化する事業

人工知能(AI)をはじめとするデジタル技術の急速な進化、気候変動の顕在化、再生可能エネルギーの普及、SDGsの推進、新型コロナウイルス禍による社会変容など、この10年間で社会は大きく変わりました。こうした中、復建調査設計は総合建設コンサルタントとして、目まぐるしく変化する時代のニーズを先取りしながら、より良い社会づくりに貢献するためのチャレンジを続けてきました。その取り組み事例を紹介します。



未来社会創造企業とは 社会課題解決企業である

時代や社会が抱えるさまざまな課題を解決するため、復建調査設計は次々と新しい事業をスタートさせました。デジタルトランスフォーメーション（DX）による生産性向上、グリーントランスフォーメーション（GX）による脱炭素化など、最先端の技術を生かし、豊かな未来社会の創造を目指しています。

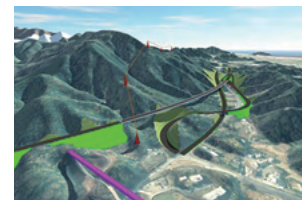
デジタル技術で価値創造

D X 推進センター

前身として、2013年にCIM推進室（2018年にBIM/CIM推進室に改名）を発足させ、中国地方における建設コンサルタントの先陣を切ってBIM/CIMの推進に取り組んできました。一方で、建設業界におけるDX推進の流れを受け、2020年5月にICT推進室を加えたDX推進センターを開設しました。本センターは、最先端のデジタル技術を活用して業務の効率化と生産性向上に取り組むと共に、インフラ分野のデジタル化推進による社会課題解決を支援しています。

●計画・設計における3Dモデルの活用推進

設計対象インフラの3Dモデルを計画・設計・工事・維持管理段階の様々なシミュレーションへの活用を推進することで、関係機関との円滑な合意形成や設計成果の効果的なチェックを促し、BIM/CIM推進業務を支援しています。また、3DCADで作成した都市モデル上に各種災害関連情報を表示するなど、都市デジタルツインの社会実装に向けたアプローチを支援しています。



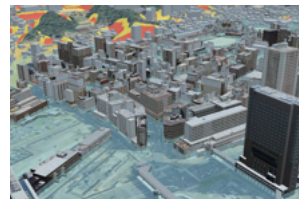
山麓部の道路計画3Dシミュレーション



都市高架橋計画の3Dシミュレーション



山岳橋梁の施工計画3Dシミュレーション



デジタルツイン上への災害リスク表示

●3Dプリンターの活用推進

本センターで所有する高精度の3Dプリンターによって3Dデータから各種の模型作成を行い、事業関係者等への説明を支援しています。また、3Dプリンターで作成した白色模型に、プロジェクションマッピング（P.M.）技術を用いて交通計画や日照、景観や防災対策などの複雑な情報を投影し、視覚的アプローチで直感的理解を促進します。



3Dプリンタで作成した都市計画道路模型



白色模型へのP.M.（上：高低差、下：浸水範囲）

●最新のICT技術の活用推進

画像認識AIによる物体検出技術を用いた動植物の判別調査、交通量調査自社開発のセンシングデバイスを用いた人流解析、VR/AR等の画像処理技術を用いた地域住民へのサービス等、最新のICT技術を様々な分野の業務への活用を推進し、効率化と生産性向上に努めています。また、ICT推進室が中心となって2025年5月に社内生成AIサービス「neoAI Chat」を導入し、多くの社員が日々の業務に効果的に活用しています。



画像認識AIによる魚類判別



画像認識AIによる交通量調査



センシングデバイスによる人流解析



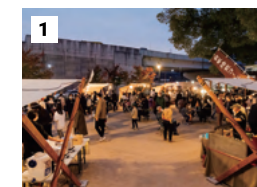
ARによる地域住民の洪水時浸水疑似体験

時代や地域のニーズに対応

社会デザイン創発センター

さまざまな社会問題や地域課題を捉え、将来起こり得る未来の課題を予測し、地域経営・都市経営の在るべき姿を追求する組織として、2015年5月に開設しました。本センターは、時代の要請を先んじて捉えるシンクタンク、さらにはドゥ・タンクとして、さまざまな立場・役割で課題解決に取り組んでいます。

- ① 街を守り、次世代へつなぐ**地域サポーター**として
エリアマネジメント活動 公的空間でのマルシェの開催
- ② 事前防災・事前復興の**まちづくりデザイナー**として
東京大学復興デザイン研究体 講座開設10周年記念セミナー
- ③ 街の価値を生む**地域プロデューサー**として
再開発事業勉強会の運営
- ④ 行政の政策実現を支える**まちづくりプロモーター**として
グリーンスローモビリティを活用した政策実現のための社会実験
- ⑤ 街の未来をつくる**地域プロバイダー**として
西宮中央運動公園PFI事業への参画
- ⑥ **企業市民**としての社会貢献
岩手県宮古市との包括連携協定締結



カーボンニュートラルを目指す

GX推進センター

持続可能な社会の実現に向けて、化石燃料中心の経済・社会構造をクリーンエネルギー中心へ転換し、脱炭素と経済成長を両立させるGXに取り組むため、23年5月にGX推進センターを創設しました。現在、以下のプロジェクトを推進しています。

●洋上風力発電事業の推進プロジェクト

四方を海に囲まれた日本の恵まれた立地を生かした洋上風力発電施設の設置が期待されています。当社では、特に設計法が確立されていない浮体式基礎の開発に積極的に挑戦し、海洋再生可能エネルギーの普及に貢献していきます。



●カーボンライジング事業の推進プロジェクト

カーボンニュートラル達成に向けて重要性が高まるブルーカーボンを中心に、独自開発した藻場観察用水上ドローンを活用し、カーボン吸収量の調査を推進するとともに、カーボンライジング事業の提案と実践にも取り組んでいます。

●脱炭素地域づくりを機とした地域ビジネス（出資型新事業）創出プロジェクト

建設コンサルタントとしての経験と知見を活かし、地方自治体が取り組むエネルギー事業の立ち上げや地域課題の解決に資するシュタットベルケの構築を支援することで、脱炭素化と経済循環、さらには防災や暮らしの質の向上に貢献しています。



災害にも老朽化にも 負けない社会を築くこと

相次ぐ自然災害、深刻化するインフラの老朽化。街や暮らしの安心・安全を守るため、あらゆる角度から対策や整備に取り組むのも復建調査設計の大きな役割です。とりわけ防災や減災ではハードとソフト両面からの支援を展開。生活者に寄り添った取り組みでも評価を高めています。

西日本豪雨災害

復旧復興を総合的に支援

2018年7月に発生した西日本豪雨では、中四国地方の各地で斜面崩壊・土石流・河川氾濫が同時多発的に発生し、死者数が200人を超える未曾有の災害となりました。当社は国土交通省および地元自治体からの要請を受け、被災直後からの迅速な被害状況を把握。復旧に向けた測量・調査・計画・設計業務に総合コンサルタントとして貢献しました。また、学協会などの調査団にも積極的に参加し、災害の原因究明のための調査活動にも尽力しました。

この災害では、土砂災害や河川氾濫による直接被害に加え、交通網・ライフラインへの影響、環境負荷、災害廃棄物の処理、さらには医療・教育を含む多様な社会問題が発生しましたが、これらの複合的な課題に対し社を挙げて取り組みました。初動段階では交通遮断により被害把握が困難でしたが、ドローンによる空中写真や衛星画像を活用して情報を補完しました。さらに、3D技術による調査・解析やBIM/CIMを用いた設計など、DX技術の進歩とその有効性を実感する災害でもありました。

また、被災された方へのヒアリングやワークショップなどを通じて、被災状況や再建に必要な取り組みを把握し、災害からの計画的な復興、さらに災害の教訓を踏まえた地域づくりを進めるための復興計画・復興まちづくり計画の策定に取り組みました。翌年には「平成30年7月豪雨災害に係る社内シンポジウム」を開催し、災害対応で得られた教訓を全社で共有しました。シンポジウムでは、業務に携わった社員それぞれの立場からの課題を紹介し、今後の対応策についての議論を通じ、将来の災害に備える体制づくりと、さらなる技術力の強化を誓いました。



私たちが設計した対策工



社内シンポジウム

災害対策も老朽化対策も

インフラメンテナンスに注力

各種社会インフラの予防保全型点検、自然災害から人々の暮らしを守るための防災点検、目に見えない異常を察知するための調査など、さまざまなシーンで最新の技術を駆使したインフラメンテナンスを提供しています。



●道路構造物の点検・調査・診断・補修/補強設計

橋梁、標識・照明柱他道路付属物、トンネル等の各種道路構造物に対して、橋梁点検車、ドローン、高所作業車等、現場状況に応じた機材を使用して定期点検・健全度調査・診断を行い、必要に応じて補修/補強設計を行います。



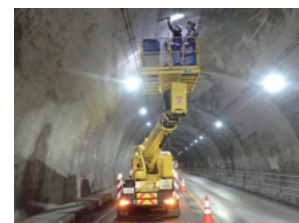
橋梁点検車による橋梁点検



ドローンによる高橋脚点検



高所作業車による道路標識点検



高所作業車によるトンネル点検

●各種インフラの水中変状調査

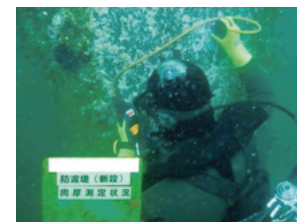
水中における作業が必要な上水道・下水道施設、ダム施設、港湾施設等のインフラに対して、各種ロボットやダイバーを活用した変状調査を行います。また、浄水を貯留する調整池に対しては、清掃も同時に行うことで大切な水を守ります。



有線水中移動式カメラによる下水管調査



水中ドローンによるダム躯体調査



ダイバーによる港湾施設調査



ダイバーによる調整池の清掃・調査

●路面下等の空洞・変状調査

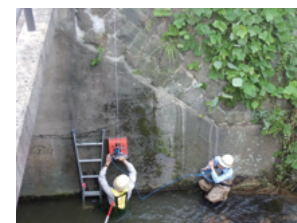
手押し型、ハンディー型、車両搭載型の地中レーダを使い分け、路面下、護岸、河川背後地盤等の様々な空洞・変状調査を行います。また、路面陥没等の甚大な被害が発生した場合には、昼夜を問わず迅速な緊急調査に対応します。



路面下空洞調査



護岸の変状調査



河川背後地盤変状調査



3D地中レーダ搭載車両

●道路防災点検、砂防施設点検、地すべり施設点検

道路交通を妨げる落石・崩壊、岩盤崩壊、擁壁・盛土の損傷等を未然に防ぐための防災点検や、土石流災害を防止するための砂防施設の点検・診断、地すべり対策施設の点検等を行います。



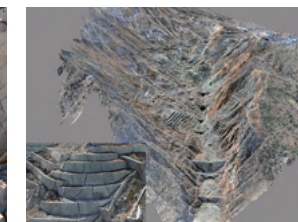
道路防災点検



砂防施設点検



地すべり施設点検



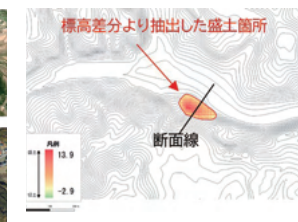
Sfm解析による地すべり施設の変状視覚化

●既存盛土の基礎調査

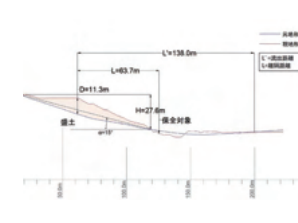
2021年7月の静岡県熱海市の土石流災害をきっかけに制定された盛土規制法に対し、机上での盛土造成前後の画像色調(植生)比較による盛土抽出や標高差計算による差分図・断面図の作成、及び現地での地形・変状調査を行います。



造成前後の画像色調比較による盛土抽出



差分図による既存盛土箇所の明示



既存盛土断面図



既存盛土現地調査

新しい技術の開発で 新しい市場を開拓する

新市場の獲得と形成、あるいは技術競争力の強化を図ることを目的に、各事業部門では技術開発に積極的にチャレンジ。この10年間では、各種調査ロボットや災害予測シミュレーション技術、AIを活用した新システムを形にするなど、さまざまな成果を上げています。

安全かつ高精度な各種調査ロボットの開発

●ブルーカーボン計測用水上ドローン

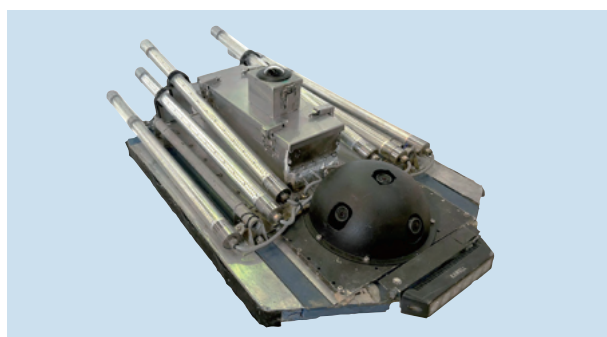
藻場などのブルーカーボン生態系を効率的に調査できる水上ドローンです。藻場調査で問題となるスクリーへの海藻の絡みを、船上に推進機構を配置することで解決。推進機構を4軸とすることで高精度の自動航行が可能です。



水上ドローン

●自然流下式TVカメラによる水路トンネル調査技術

水路内の自然な流れを利用して船型カメラを流下させ、水路内部状況を動画撮影し、記録する調査技術です。撮影した動画より内面損傷などを把握します。長距離区間でも、安全かつ効率的な調査が可能です。



水路トンネル内面ロボット

●ボーリングコア検診車「コアロボ」

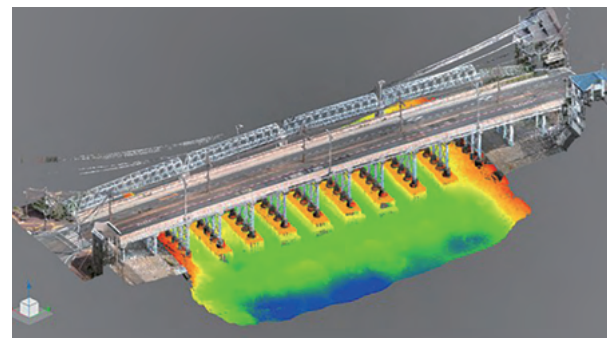
ボーリングコア特性をより詳細かつ定量的に評価するため、ボーリングコアの4K高解像度画像とX線画像を同時に撮影する車載移動型撮影システム「コアロボ」を開発しました。



「コアロボ」によるボーリングコアの撮影状況

●海底の地形を「診える化」 ナローマルチビーム、港湾点検業務

海底地形を3次元で「診える化」するナローマルチビーム技術。港湾構造物の洗掘状況や消波ブロックの配置を面的に把握し、視覚的で正確な地形データを活用し、効率的かつ正確な地形把握を実現しています。

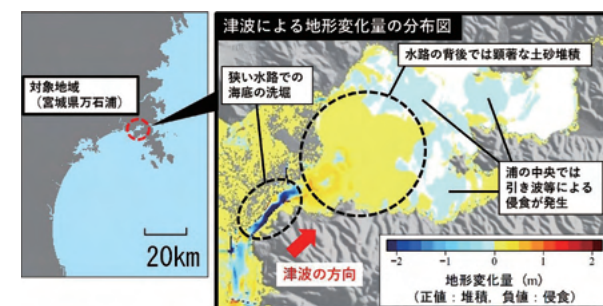


ナローマルチビーム計測結果の活用状況（橋梁部の点検）

多発する自然災害の被害を予測するシミュレーション技術

●津波土砂移動計算

津波土砂移動計算は津波時の水位や流速だけでなく、同時に海底地盤の洗掘や堆積現象を予測する解析技術です。地形変化に伴う津波の増大や港湾などの航路埋没、港湾・空港内の土砂堆積状況が把握できるため効率的な津波対策や、実行性の高い災害復旧計画の策定にも貢献します。

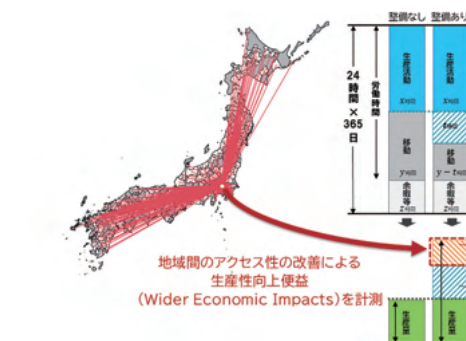


津波土砂移動計算例

土木分野におけるEBPMの実務展開

●生産性向上便益(Wider Economic Impacts)の計測技術の開発

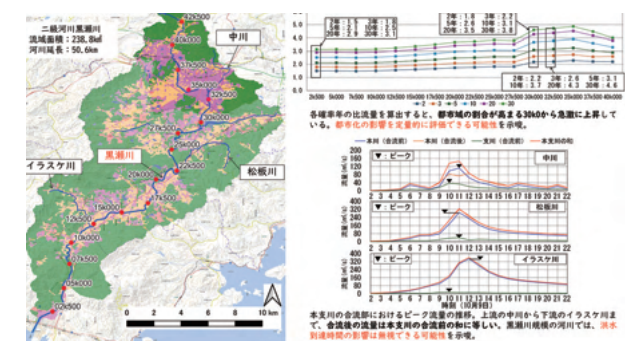
わが国の道路事業評価において活用可能な「生産性向上便益」の計測技術を神戸大学と共同で開発しました。これは、英国で開発されたWider Economic Impactsの計測技術を日本版に改良したものであり、実務的に活用可能なパラメータの推定に国内ではじめて成功しました。



生産性向上便益(Wider Economic Impacts)のイメージ

●RRIモデルを用いた洪水の時空間分布解析

流域治水の計画に当たって流域の流出特性の把握は極めて重要です。降雨流出氾濫モデル(RRIモデル)を高精度に構築することで、洪水の時空間分布解析やリアルタイム予測が可能となり、ハード・ソフト両面で効果的な治水計画が立案できます。

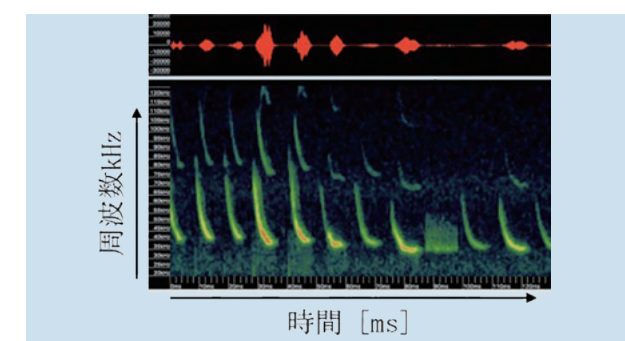


RRIモデル計算例

AIによる生物調査の高度化

●コウモリ類の超音波音声データを用いた 種同定システムの開発

環境アセスメントなどで注目される貴重種のコウモリ類の種同定を効率的に行うため、現地調査で記録した音声データからAIを活用しコウモリ類が発する超音波の周波数データを自動抽出し、その波形から種を同定する技術を開発しました。



コウモリの周波数

分野を超えて 広がる事業領域

国際貢献

困難に立ち向かい見つけた希望の光

当社が初の海外拠点として進出したミャンマーで、事務所を設立して29年目を迎えました。1997年の旧軍政時代に事務所を設立し、十数年ほど仕事の少ない時代に何とか生き残り、2010年から20年は飛ぶ鳥を落とす勢いの経済成長の時代を迎えました。しかし、20年初頭から数年間にわたり、新型コロナウイルス（COVID19）の蔓延による出入国規制などが続き、経済活動に冷水を浴びせかける結果となりました。さらには、21年2月1日に、軍部によるクーデターが勃発し、その直後から経済活動、特に海外投資を必要とするような大型の建設関連案件はほぼ停止状態となっています。また、25年3月28日にはミャンマー北部の大都市マンダレー近郊を中心とするマグニチュード7.7の大地震が発生し、マンダレーやその近郊では多くの建物や構造物が崩れ落ち、多くの方々が被災されました。

このような中で、23年5月には、国は異なりますが、インドネシア国パティンバン港開発事業（第一期）プロジェクトで、当社は地盤改良設計およびその施工管理を担当し、土木学会賞技術賞を受賞できました。このことは、海外業務に従事する我々にとって一筋の希望の光となりました。

当社は、今年で創業80周年の記念の年を迎えることができましたが、ここ数年のミャンマー情勢は、コロナの蔓延、軍事クーデターの勃発、地震災害など大変厳しい環境で推移してきました。80年間で様々な苦難を乗り越えてきた会社の歴史を胸に、今後とも前向きに国際貢献に取り組めます。



Patimban港建設状況



ヤンゴン事務所全景

グループ会社急増

10年間で7社をグループ化

当社は、2008年に日本構造橋梁研究所の株式譲受・グループ化を行ったことを皮切りに本格的にグループ経営に舵を切りました。2016年から創業80年に至るこの10年間では天野測量設計や京都市の文化財サービスをはじめ、国内6社・海外1社の会社を新たにグループ会社としました（下表）。

我が国における少子高齢化、土木離れという流れが進む中、防災対策やインフラ維持管理が必要な時代において建設関連業の担い手を確保することや地域の建設関連事業会社を存続するという使命のもと、当社は事業承継とグループ全体の健全な発展を先導してきました。

2016年から26年までの10年間にグループ会社となった企業

2017年 5月	Aizawa Myanmar Co., Ltd. (ミャンマー国) ※1
2017年 6月	(株)天野測量設計 (山口県)
2018年 2月	(株)文化財サービス (京都府)
2018年 9月	(株)サンキ (愛知県)
2021年 6月	(株)宮崎測量設計コンサルタント (高知県)
2023年 12月	(株)西部試験工業 (長崎県)
2025年 3月	(株)ジオテック (高知県)

※1 曾澤高圧コンクリート株式会社（本社：北海道苫小牧市）、Tiger Supply Co., Ltd. (ミャンマー国)との合併会社。

SPECIAL ROUNDTABLE DISCUSSION

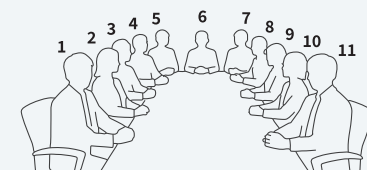


次代を展望する座談会



夢ある未来は、 夢ある会社から

豊かな社会や暮らしを築くには何が大切だろう。未来社会創造企業としてどんな未来を描けるだろう。フッケンの10年先、20年先を担う次世代社員11人が全国各地から集まり、座談会を開きました。それぞれの仕事内容やそれに取り組む熱い思い、フッケンという会社の魅力や目指すべき将来像までたっぷりと話し合いました。



1. 姉川 倫太郎 [保全構造部構造技術課]
2. 角川 真帆 [保全構造部]
3. 金藤 将啓 [東京支社第一技術部河川砂防技術課]
4. 石田 圭太 [大阪支社技術部空間情報課]
5. 木我 圭輔 [東京支社営業課]
6. 三上 貴士 [環境部新工ネ資源循環課]
7. 河賀 雄大 [経営管理本部経営企画部経営企画室]
8. 小井戸 一浩 [四国支社地盤技術課]
9. 新田 成美 [道路地域整備部道路技術課]
10. 阿南 沙織 [九州支社沿岸地震防災課]
11. 大塚 健裕 [松山支店総合計画課]

SPECIAL ROUNDTABLE DISCUSSION



次代を展望する座談会

夢ある未来は

街をつなぎ、

社会を支える仕事

—80年の歴史の中で、フッケンが注力してきた事業の一つがインフラ整備です。どう取り組んでいますか。



姉川 私の担当は、橋梁の設計です。東京・大阪を中心に、関東、近畿、中国地方など広範囲にわたり、これまで大小さまざまな橋梁の新設や耐震補修に携わってきました。印象に残っているのは、河川氾濫で破損した萩市の橋の架け替え設計です。施工中にさらなる豪雨で被害を受けるなど、苦労しながら無事に開通式を迎えた時には大きな達成感がありました。橋梁設計では、座標のわずかな誤差が致命的なミスにつながるため、常に精度と正確さを最優先に業務に取り組んでいます。

新田 国道や県道、市道をはじめ、交差点や電線共同溝などの設計に携わっています。例えば道路設計では、地形や周囲の環境に応じて最適なルートを検討し、関係機関や地元住民との調整を重ねながら計画を進めます。交差点改良では事故や渋滞の原因を分析し、それに適した改善策を提案します。単一の交差点だけでなく、周辺の交通流全体を考慮することを意識し、安全で使いやすい道路づくりを目指しています。

阿南 漁港や港湾、海岸の計画や設計や



維持管理などが主な仕事で、九州と山口を中心に業務を行っています。ここ最近では、長崎の漁港での護岸設計に携わりました。水深が浅く通常の工法では施工が難しい現場で、護岸の背後に道路があるなど制約条件が多く、施工方法の検討に苦労しましたが、現在は完成に向けて着々と工事が進んでいます。海岸設計には河川や地盤の知識も欠かせないため、社内の関連部署と連携しながら業務を進めています。

木我 私は東京支社で主に埼玉県や県内の市町村、関東地方整備局などを顧客に営業活動に取り組んでいます。分野は橋梁、道路、河川とさまざまなインフラ整備を担当。営業として、お客様が何を求めているかを常に意識しながら行動することを心がけています。会社の名があまり知られていない地域でも一度、業務に携わると評判が高まり、次の引き合いにつながる点にわが社の技術力の高さや喜びを感じています。



地域の防災力を

どう高めていくか

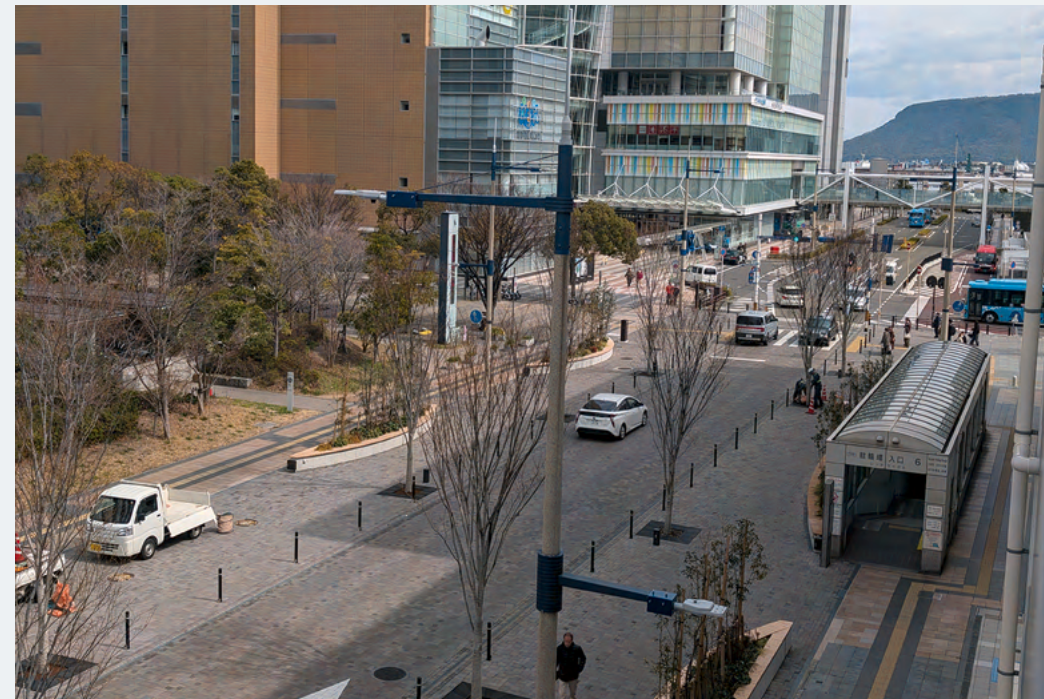
—安心・安全な地域づくりのためにどんな活動に携わっていますか。

角川 橋梁の耐震補強に関わる私は、茨城県の出向先で研究を重ねています。橋梁の耐震設計に関する基準は、阪神・淡路大震災や東日本大震災といった大きな地震のたびに見直されてきました。



しかし、古い橋の多くは、現在の基準が想定するような地震動に耐えられる設計にはなっていません。今後も継続的に補強や設計基準の検討を進めていくことが重要だと考えています。

金藤 関東地区で河川計画や水理解析に携わっています。雨が降った時など



の水の流れを分析する水理解析は、防災に加え、河川の近くにある橋梁や道路にも関わる重要な技術です。都市部では調整池の効果なども考慮する必要があります。総合的な視点で地域の安全に貢献できるよう努めています。

石田 私の担当は測量調査。現場で現況地形を測量し、平面図や断面図を作成して設計部門に提供するのが役割で、社会資本整備の出発点といえる仕事です。設計者は図面がなければ設計に着手できないため、現況の図面をいかに正確に提供するかが重要だと考え

ています。大阪を拠点に、西は山口県まで広範囲で業務を行っており、災害現場の現状測量や崩れた擁壁の測量なども担当しています。

小井戸 地質調査に当たっています。測量で得られた地形情報に、ボーリング調査などで得た地質情報を加えて設計に反映させるのが主な役割です。地質は地域によって大きく異なり、河川や海沿いでは堆積物が多く、山地では岩盤

が強固な場合もあります。四国全域を担当する私の場合、地滑り対策の設計も多く、ボーリング調査で地盤の弱点を把握し、必要に応じて地盤改良を提案しています。



にぎわいを育てる

それもフッケンの役割

—地域活性化や環境共生の取り組みも活発です。

河賀 経営企画室で会社の経営に関する業務や新規事業の推進に携わっています。スタートアップや大学の研究機関との連携を通じた新事業の発掘にも取り組んでおり、最近では自社の事業展開の可能性を探ることを目的に、民間ベンチャー8社がプレゼンテーションするピッチイベントを開催しました。新たなビジネスを創出することで地域活性化につなげるのが狙いです。

大塚 都市計画マスタープランの策定や公共空間の利活用支援を通じて、地域の将来像を描くのが私の役割です。所属する松山支店では、JR高松駅裏の道路を歩行者優先の空間に改修するといったプロジェクトに取り組みました。どれほど良い計画を立てても、実行されなければ意味がありません。地域の実情に合った現実的な計画をつくり、住民や行政が主体となって関わられるような環境づくりも重視しています。

三上 私は環境系の事業として、廃棄物処理施設の計画、設計、調査、管理まで一貫して関わっています。近年は、広域化や熱回収、プラスチック分別などが廃棄物処理施設のトレンド。特に燃焼時の熱を利用して発電を行うエネルギー回収型施設の設計も増えています。自治体によってごみの分別方法や性質が異なるため、地域に合わせた最適な計画・設計を行うことを重視しています。



地域に根差し、

全国で活躍できる

—ところで職場としての会社の魅力を教えてください。

河賀 自由度が高い会社ですね。一人一人の裁量が大きく、自分の判断で仕事できるのがいい。

角川 社員同士の距離が短く、何でも気軽に相談できるアットホームな雰囲気も魅力でしょう。

阿南 グループウェアを活用すれば、社内のいろいろな方とつながるので孤立感なく仕事できます。社内のママ友たちともグループラインで悩みを共有し、励まされました。

姉川 時差出勤や時間有給、在宅勤務制度が整っており、男性社員の育児休業制度の利用も増えるなど、働きやすい環境が整っていますよね。業務面では発注者からの信頼が大きく、「フッケンさんなら安心して任せられる」という声もよく聞きます。

木我 長い歴史の積み重ねがあるだけに、当社の技術に寄せられる期待の大きさを感じます。

石田 顧客の要望に迅速に対応して提案できる体制が整い、若手も自由に意見が言える風土があります。



小井戸 JR広島駅の北口一帯「エキキタ」の街づくりに関わるなど、地域活性化にも貢献できます。関わる領域も広いですね。

大塚 地域に根ざした仕事に取り組める一方、大阪や東京など全国的な仕事や国の最先端の仕事にも挑戦できます。実際に私は現在、愛媛で二つのプロジェクトを東京大学と連携して進めて

夢ある会社から

SPECIAL ROUNDTABLE DISCUSSION



次代を展望する座談会

夢ある未来は



おり、地方でこうした質の高い仕事ができる点に喜びを感じています。

金藤 社内に前例のない業務でも挑戦でき、失敗してもフォローしてくれる会社です。私の場合、東京支社に赴任したばかりの頃、関東地区の相場が分からず、かなり低い金額で受注してしまったのですが、上司のアドバイスを受け、効率的に進めることで赤字を出さずに完了させました。

三上 自分なりの創意工夫を取り入れながら、発注者に寄り添ったプランを提案できる点にやりがいを感じます。仕事を楽しめる会社だと思います。



17

設計、災害時でも安定した交通の実現、点検技術の向上などの取り組みが求められます。

石田 災害や復興時に限らず、防災に関するさまざまな情報を誰もがいつでも取得できるプラットフォームづくりに注力すべきではないでしょうか。

新田 労働力不足が深刻化の中で、人工知能(AI)やロボットの活用が進み、自動化できる業務は増えていくと思います。最新技術を使いこなしながら、地域への貢献を最重視し、住民に寄り添った街づくりやインフラ整備に取り組むのがこれからの私たちには必要ではないでしょうか。



阿南 その通りですね。80年間培ってきた技術ノウハウと、最先端のツールを組み合わせることで、さまざまな社会課題に対してより高度な解決策を提案できる会社でなくては。



三上 10年や20年先には、現段階では想定できないニーズが発生している可能性もあるだけに、自分の専門分野はもちろん、関連する幅広い分野も学んでいく姿勢が大切ではないでしょうか。

角川 専門技術を磨きながら、高い視座から持続可能な社会づくりに貢献できる会社を目指していきたいですね。

大塚 「未来社会創造企業」である私たちが目指す「未来社会」とは、さまざまな専門性を持つフックンの社員一人一人が思い描く未来像を積み重ね、総集したものでないでしょうか。それは、決して私たちのような建設業が得するようなインフラ整備ありきではないはずです。

小井戸 その時々々の社会の課題に対して、地域に暮らす人々の視点に立った取り

組みが重要と考えます。例えば過疎化が進む地域であれば、地元に戻って働く環境を整えるといったソフト面での工夫も求められるでしょう。

金藤 私たちは単なる設計やコンサルタンの会社ではなく、「社会の在り方そのものを描く」存在として、人々が安心して暮らし、未来に希望が持てる社会を創っていくのが使命だと思います。

一人一人の夢が 企業の原動力になる

—この80周年記念誌のテーマは「夢のある未来を、私たちの挑戦から」です。あなたの夢や目標を教えてください。



角川 未来は予測できない変化の連続。変化を恐れずに受け入れ、新しいやり方を試す柔軟さを身に付け、日々の業務にチャレンジします。

新田 業務的には、生活者の目線と共感を軸に、現場とデータをつなぐ役目を果たしたいです。また、建設業界で働く女性の

一人として、女性社員が定年まで安心して働き続けられる会社づくりに仲間と一緒に取り組みたいです。



石田 IoTやAIの活用は不可欠。自分の専門性を生かしつつ、最新技術を取り込み、社会課題の解決に貢献します。

阿南 役職に就いても、成長を目指し努力を惜しまない上司がおり、尊敬しています。そんな上司のような技術者になるのが目標です。あと、自分で設計した構造物を家族で見に行き、子どもに説明できるようになりたいです。

河賀 社内的には「挑戦しやすい雰囲気」を醸成するのが目標です。まずは自分がファーストペンギンとなり、率先して挑戦する姿勢を示します。

金藤 既存の枠にとらわれず、他分野との連携も積極的に進めながら、新しい領域を開拓できたら。河川分野では自然との共生が重要なテーマ。防災と環境を両立させた河川空間づくりに挑みます。

三上 私も常に何かにチャレンジしていく意識を持っていたいので、まずは新たな資格取得を目指します。

姉川 駅前再開発プロジェクトや新スタジアムや新アリーナプロジェクトなど、一大プロジェクトに携わりたいですね。退職するまでに一度で良いので、自分が設計した橋梁の維持管理業務に携わるのも夢です。

大塚 私が子どもの頃と比べても、社会から「わくわく感」が失われていることを実感しています。一人でも多くの方が希望を持てる未来を、微力ながら創造していきたいと思います。

小井戸 平時から災害発生に備える事前復興や、河川流域全体で水害を抑える流域治水などを積極的に進めます。地域の実情に即したプランを立て、実践していきます。

木我 まだ復建調査設計を知らないという新規の顧客と信頼関係を構築し、私たちが少しでも多くのインフラ整備に寄与できる機会を増やしていきたいですね。



18

夢ある会社から

成長できる場所がある 支え合える仲間がいる

DX研修

役職員全員のデジタルリテラシー向上を目指して、経験とスキルに応じた教育プログラムを実践しています。

●新入社員DX研修

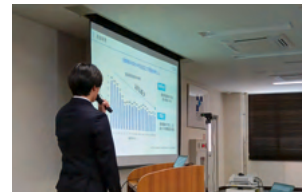
新入社員を対象としたDX研修プログラムでは、BIM/CIMを含むデジタル技術の習得に加え、問題発見から課題解決に至る実践的なスキルや変革に必要なマインドセットの育成を重視した研修を実施しています。



新入社員DX体験会



新入社員BIM/CIM研修



DX研修成果発表会(新入社員発表)



DX研修成果発表会(幹部質問)

●その他DX研修

所属ごとのDX研修や生成AI研修、役員・幹部向けの生成AI研修、DX関連のe-learningなど、職種や経験年数に応じた多様な学習機会を提供し、組織全体のデジタル人材育成を推進しています。



九州支社DX研修



岡山支社生成AI研修



役員・幹部向け生成AI研修



環境部生成AI研修

02 全社技術発表会

中期経営計画「人財・技術力の強化」の一環として、若手技術者の育成に加え、各部門の優れた業務成果や新技術への挑戦を全社で共有するため、毎年10月に全社技術発表会を開催しています。技術力の底上げと水平展開を図るとともに、新たな事業機会の創出に生かします。



03 特別講演会

社員の専門性向上と部門横断の交流促進を目的として、年1回、特別講演会を開催しています。広島にゆかりのある企業やプロスポーツチームのほか、国内有数の研究機関・企業から多彩な講師を招き、働き方や商品開発、マネジメントに加え、国家プロジェクトや先端科学技術まで幅広い知見を学んでいます。

■特別講演会の演題と講師所属

- 2015: 地域で培う仕事力(中国新聞社)
- 2016: 守るために変えていく(マツダ)
- 2017: 失敗・挫折を乗り越えながらの挑戦(元広島東洋カープ選手)
- 2018: "ICHIGANカ" (サンフレッチェ広島)
- 2019: 医療の民主化へ(エムネス)
- 2020: 自分を信じ続けることの大切さ(元サンフレッチェ広島選手)
- 2021: はやぶさ2の成功から見える宇宙の魅力とプロジェクトマネジメントの難しさ(JAXA|宇宙航空研究開発機構)
- 2022: 南極観測から探る地球環境変動と将来予測(国立極地研究所)
- 2023: 海洋学者が語る地球環境研究の現状(JAMSTEC|海洋研究開発機構)
- 2024: カンプ・ノウ国際コンペの軌跡(日建設計)
- 2025: 『THE TOKYO TOILET』& 『PERFECT DAYS』(MASTER MIND LTD.)



「チームワークを大切にしながら、一人一人が力を発揮できる」「立場や経験を問わず自由に意見が言える」「やりがいも働きやすさも実感できる」。復建調査設計はこのような職場環境の整備にも注力してきました。ここではその一例を紹介します。

04 福利厚生

●全社懇親会(親和会行事)

年1回、全社員が広島に集結し、社員同士のコミュニケーションを深める貴重な行事です。毎年趣向を凝らした「新入社員のボウリング体操」で、会場は一気に盛り上がります。コロナ禍には感染対策として、複数の会場間をオンラインでつなぐ「分散開催」といった新しい取り組みも実施しました。



●全社ボウリング大会(親和会行事)

全社懇親会の翌日には、福利と親睦、健康増進を目的に全社ボウリング大会を開催します。成績上位者やチーム賞に豪華景品を用意し、参加者一同が白熱したプレーを繰り広げ、大いに盛り上がるイベントです。



●社内旅行

会社から補助金が支給され、毎年所属毎に社内旅行を実施しています。多くの社員が参加し、日々の仕事から離れリフレッシュするとともに、チームワークの向上にもつながっています。



●クラブ活動

野球部・サッカー部に加え、バドミントン部が新設されました。年齢層も幅広く多くの社員が所属し、活動を通して親睦を深めています。



05 職場環境改善

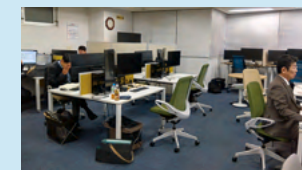
2020年の新型コロナウイルス蔓延を契機に、全社員への内線兼用スマートフォン、ノートパソコンの配備、WEB会議室の増強を実施。在宅勤務やサテライトオフィス勤務、WEB会議が可能な職場環境を整備しました。コロナ禍以降も、週1回を原則として在宅勤務を適用できるように運用規定を定め、多様な働き方に対応しています。また22年度から東京支社では、オフィス全体のスペースを効率的に活用でき、かつ社員間のコミュニケーションの活性化も推進できるフリーアドレスを導入しています。24年度には作業服を更新。機能性、色、女性用サイズの展開など、社員のさまざまな意見を取り入れ、時代にマッチしたデザインに一新しました。旧作業服の処分では「ポリエステル再利用」や「古着deワクチン」により、CO2削減につなげる取り組みを実施しました。



WEB会議室増強



WEB会議室増強



フリーアドレス



ユニフォーム更新

06 労働組合活動

組合員の健康増進を目的とした「Health Promotionプロジェクト」では、健診・検診の費用を助成しています。また、組合員の交流促進と結束力の強化を目的とした「Greenプロジェクト」では、社会への還元活動として、地域のボランティアやスポーツイベントの参加者に一定の助成を行い、活動を支援しています。





創業80周年
特別企画

PHOTO CONTEST

創業80周年を記念して開催されたフォトコンテストの優秀賞受賞作品11編を紹介します。応募に当たって次の3テーマが与えられました。

THEMA 01 80年の挑戦から未来へ
～インフラが創る持続可能な物語～

THEMA 02 夢のある未来への架け橋
～次世代へ繋ぐ豊かな社会基盤～

THEMA 03 未来を構想するプロフェッショナル
～転換期に挑む復建の技術と情熱～

THEMA 01 清水 湧太 [松山支店 技術課]

『島の暮らしを支える大海原の抛り所』

水産業が盛んな愛媛県の中でも、離島でありながら特に漁業活動が盛んな「戸島の本浦漁港」。復建調査設計はこの漁港に長年にわたりさまざまな港湾整備事業で携わり、島の人々の暮らしを支えてきました。島の人々の優しさにも触れ、私自身もすっかり魅了されたこの島で出合った、離島の港と海が織りなす雄大さと一体感を一枚に切り取りました。



THEMA 01 廣井 和也 [山口支社 技術課]

『猿猴橋町、最後の便』

2025年8月2日、広電・猿猴橋町停留場に向かう最後の列車を収めた一枚です。別れの瞬間を見届けようと多くの人が詰めかけ、夜の停留場は静かな熱気に包まれています。灯りを映して走る電車に、まちの記憶と名残、広島を結んできた時間の重みを重ねた一枚です。



THEMA 01 江田 祐貴 [総合計画部 道路計画課]

『静かな踏切』

山口県・長門湯本温泉の一角にあるJR美祿線の踏切を撮影しました。JR美祿線は温泉街の他にも、田園地帯や山岳地帯を縫うように走る風光明媚な路線ですが、2023年の豪雨災害により被災し、BRTでの復旧が決まりました。今後、鉄道施設の解体が進み、こうした地域に溶け込んだ鉄道風景も見られなくなってしまう。BRT化により持続可能な公共交通になることを願う一方で、美しい鉄道のある風景が失われることに寂しさも感じます。



THEMA 01 中井 真司 [河川砂防部]

『20年を超えて静かに大地を守る』

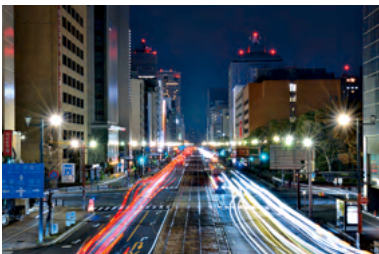
2004年に世羅町で発生した地すべりの対策工として設計し、翌年施工された横ボーリング工です。施工後20数年が経過しましたが、今でも元気に地すべりの原因となる地下水を排除し続けています。ひっそりとした佇まいではありますが、実に堂々とい仕事をしており、魅力的です。河川砂防部門で設計する防災構造物は、華やかさはありませんが、縁の下の力持ちとして、私たち生活を守る持続可能な安全に貢献してくれています。



THEMA 02 森田 大也 [道路・地域整備部 道路技術課]

『灯りが紡ぐ街』

夜になっても街灯や車の光跡が街を照らし、静かな賑わいを創出した街並み。設計に携わった西広島バイパス都心部延伸事業により、やがて国道2号には高架橋が架かり、今の景色は新たな姿に変貌していくため、今この瞬間を切り取り、未来に紡いでいきたいと思っています。



THEMA 02 阿南 大樹 [環境部 新エネ・資源循環課]

『桜の下、安心をつなぐ一歩』

ゾーン30プラスが導入されたこの道路では、ハンプと横断歩道を組み合わせたスムーズ横断歩道が整備され、通過車両の速度を抑制するとともに、ドライバーから子どもを見つけやすくする工夫が施されています。桜咲く春の陽だまりの中、妻と娘が安心してスムーズ横断歩道を渡る姿が、子どもの安全を守り、次世代に繋ぐまちづくりを表現しています。



THEMA 02 大塚 健裕 [社会デザイン創発センター]

『復興の志 自然と歴史・文化を未来へつなぐ』

H30豪雨の被災地「真備地区」の復興の風景。自身は、当地区の復興計画策定及びこの復興公園の構想策定に従事した。写真タイトルは復興計画で掲げた復興の理念。発災後7年が経過した当地区の暮らしの情景を写した。水害時にはまだ誕生していない世代の子が青い空の下、堤防破堤箇所を整備された公園で遊ぶ姿を見て、復興の志を受け継ぐ復建の一員として貢献でaきた喜びを感じた。管理棟は隈研吾事務所の設計。



THEMA 03 高宮 晃一 [大阪支社 地盤技術課]

『築く明日 見えない基盤に刻む情熱』

地盤改良の現場で、先輩技術者の背中を追いながら若手が歩む一枚。雲間から差す光は、厳しい環境の中にも希望を見出す私たちの姿勢を映しています。建物を支える地盤という見えない部分にこそ、プロフェッショナルの技術と情熱が注がれる。先達から受け継いだ技術を研鑽し、次世代へ繋ぐ。転換期だからこそ、揺るがない基礎を築き続ける復建の誇りがここにあります。



THEMA 03 小笠原 洋 [地盤環境部 探査技術課]

『“聖なる岩”を護る』

三重県伊勢市二見ヶ浦の夫婦岩は、全国に名高い景勝地である。この夫婦岩は昭和42年に大規模補強がなされたが、近年、劣化が進んでいる。ご縁あって二見興玉神社より現地診断を依頼いただき、現地視察することができた。写真はその一風景で、補修部脱落や岩盤剝離などへの事後対応を神社に提案した。維持管理は、表面変状と地面の奥を併せ見通す“眼”が求められる。聖なる岩に挑めることは地盤技術者の本懐である。



THEMA 03 柳川 真菜 [東京支社 第一技術部 河川砂防技術課]

『UAVで挑むインフラメンテナンス』

大阪府の都市浸水を防ぐ、地下深くに建設されたトンネル河川。この写真は、その入口の1つ「美園立坑」を最新のUAVで調査した際の一枚です。高さ10mにも及ぶ巨大な地下空間は照明も限られ、人の目では全ての損傷を捉えきれません。更新が極めて難しい大都市の地下施設は、確実な調査と補修の継続が大切です。私たちの暮らしを守るインフラを、土木と情報の技術で次世代へつなぐ。その挑戦を実感した瞬間でした。



THEMA 03 岡本 良徳 [空間情報部]

『測量現場、サプライズあり!』

東京都発注の「令和7年度小河内貯水池堆砂測量作業委託」で、奥多摩湖の外周を現地踏査してきました。私が先頭をあるいていたところ、後ろの中本君から突然大きな声が聞こえてきました。振り返ってみると、なんと、二ホンカモシカがいるじゃないですか。こんな至近距離で見たのは、はじめてでビックリしました。でも、それ以上に中本君の顔が面白すぎて、せっかくなので一緒に写真を撮りました。

